

県立図書館だより

令和元年 6 月

青森県立図書館報 第 34 号



6 月 27 日～28 日に

北日本図書館大会青森大会 を開催します

北日本図書館連盟、青森県教育委員会及び青森県図書館連絡協議会が主催する北日本図書館大会が、7年ぶりに本県で開催されます。

本大会では、弘前市出身の鎌倉幸子さんが「ゼロから図書館をつくる」と題して基調講演を行います。

また、事例発表として、「本のまち八戸」を標榜する八戸市立図書館、五所川原圏域を代表する五所川原市立図書館及び“オガール”というまちづくりの中核施設として成長し続けている岩手県紫波町図書館から取組を紹介してもらいます。

シンポジウムでは、「元気な図書館」の取組事例を参考に、図書館職員、利用者及び地域がもっと元気になるため、私たちが目指すべき図書館の在り方についてディスカッションします。ご興味のある方は是非ご参加ください。

1 大会テーマ 『めざせ！元気な図書館』

2 期 日 令和元年 6 月 27 日（木）～28 日（金）

3 会 場 青森県総合社会教育センター 大研修室

4 対 象 公共図書館、公民館図書室、学校図書館、
図書館協議会委員、図書館ボランティア、
一般県民 等

5 参加料 県内参加者 無料
県外参加者 2,000 円



平成 30 年度北日本図書館大会秋田大会

目 次

北日本図書館大会青森大会を開催します	1
青森県近代文学館「特別展 詩人・一戸謙三」	2
こんなレファレンスがありました	3～6
こどものひろば	7
ご存じですか？この人・この資料	8
ようこそ文学館へ！	9
カウンターからひとこと	10

青 森 県 近 代 文 学 館

「 特 別 展 詩 人 ・ 一 戸 謙 三 」



青森県近代文学館では、令和元年7月13日（土）から9月23日（月・祝）まで、企画展示室において「特別展 詩人・一戸謙三」を開催します。

詩人・一戸謙三（いちのへ・けんぞう）は、1899（明治32）年、黒石町（現黒石市）に生まれ、県立弘前中学校を経て、1918（大正7）年、慶応大学医学部予科に入学し本科に進むも、1920（大正9）年に経済的理由からやむなく退学、失意のうちに帰郷し、小学校の代用教員となります。

一戸を詩の道へと導いたのは、弘前中学校卒業後に読んだ福士幸次郎（ふくし・こうじろう）の詩集『太陽の子』への感動でした。フランス象徴派美学の影響を受け、ドイツ・オーストリアの新ロマン主義を吸収し、斬新な日本的シュールレアリスム詩を確立した一戸は、その後、ジャコブ、コクトー、イヴァン・ゴルの影響のもと、散文詩形式による伝統とモダンの結合を試みます。プロレタリア派との深刻な対立を経て、一戸がたどりついたのは、自分本来の言葉で詠い上げる方言詩でした。

県詩壇におけるリーダーとして長きにわたり活躍した一戸謙三の詩業に迫る展示です。

○期 間 令和元年7月13日（土）～9月23日（月・祝）

午前9時～午後5時 入場無料

※休館日：7月25日（木）、8月22日（木）、9月11日（水）

○場 所 青森県近代文学館企画展示室（青森県立図書館2階）

○関連行事 ※参加無料

- ・ 第1回文学講座 7月28日（日）青森県総合社会教育センター大研修室
- ・ 第2回文学講座 8月18日（日）青森県総合社会教育センター大研修室
- ・ 日曜講座 9月15日（日）青森県立図書館研修室

※くわしくは、チラシやHPをご覧ください。電話 017-739-2575 までお問い合わせ下さい。

～ こんなレファレンスがありました ～

【第31回】

故郷(ふるさと)の話題読み語り

「あなたの瘤取り爺さんが、出会ったのは・・・？」



「桃太郎」に「かぐや姫」、「かちかち山」に「舌切り雀」……。幼い頃に聞いた昔噺は、“むか〜し、むかし”に始まって、勇ましい若者や、嫺やかなお姫様、ちょい悪だけど、どこか憎めない敵役など、お馴染みの登場人物達が、息つく暇もなく大活躍。語り口も、とんとん、とんっと小気味良く、子どもたちを、お伽噺の世界に連れていってくれます。

はらはら、ドキドキしながらも、最後には“悪いことをした者は”退治されたり、戒められて、ほっと安心できたものでした。

さて、今回は、そんな昔噺の登場人物についてご質問いただきました。

【質 問】

「こぶとりじいさん」の絵本を借りたいのですが、おじいさんが山で出くわすのは、「鬼」だったと記憶しています。でも、知人は「出てきたのは鬼ではなく、天狗だよ」といいます。「天狗」がでてくる絵本は、読んだことがないのですが、ありますか？

質問を受けた担当者も、鬼がでてくる“こぶとり”育ちでしたから、「天狗」…？と思いつつも探したところ、「天狗」の出てくる絵本が何冊も見つかりました。

ご質問いただいた方は、驚きながらも、気に入った絵本を見つけ、借りていかれました。

レファレンスとしては終了したのですが、鬼派？としては、どうにも気になります。

そこで、スタッフや知り合いに「瘤取り爺さんに出てきたのは、鬼？天狗？」という質問で、リサーチしてみました。

下は中学生から上は70代まで、30人に聞いてみたところ、「天狗」派4人、「鬼」派は23人でした（※残りの3人は記憶が曖昧とのこと）。

「鬼」派が多かったのですが、年齢や性別もばらばら。年代によって違うといった法則性はなさそうでした。

それではと、児童室にある「こぶとりじいさん」を紙芝居、絵本、読み物と総ざらい、見つかった18冊を見てもみたら、先ほどとは逆に、「天狗」が出てくる本が10冊、「鬼」が出てくるものが8冊と、僅かですが「鬼」が劣勢でした。

それらの本を読んでみると、登場する妖以外にも、違いがあることに気付きました。瘤が頬ではなく、額についているなど、何か所かあるのです。同じ昔話なのに、どういうことでしょうか。改めて事典を調べてみることにしました。



『こぶとり』

(松谷みよ子/文 瀬川康男/絵
フレーベル館 2003)

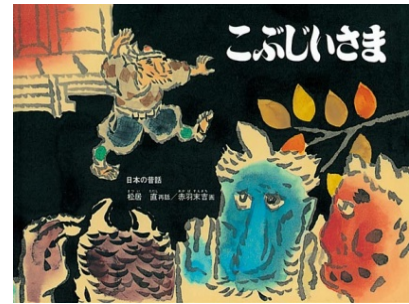
「天狗」派の絵本のひとつ。
ここでは、瘤のある二人のおじいさんが、瘤取りの願掛けのために一緒にお堂にこもります。
『聴耳草紙』からの採話です。

『日本昔話事典』（弘文堂 1994）によると、「こぶとりじい」という話の歴史は古く、鎌倉時代初期には、既に人々によく知られた物語として伝わっていたようです。

書き物として残されている中では、鎌倉時代中期の建暦2（1212）年から承久3（1221）年頃に編まれたとされる説話集『宇治拾遺物語』が最も古く、次いで文永2（1265）年頃に編まれた教訓説話集『五常内義抄』に書かれているものが、古いそうです。

『宇治拾遺物語』を確認したところ、巻第一に、「三、鬼二癭被取事（おににこぶとらるること）」とあり、ここでは「鬼」が登場します。

主人公の一人「右の頬に瘤のある翁」は、薪を取りに入った山中で、雨に降られ、木の洞で雨宿りをしていたところ、鬼の宴に出くわします。



『こぶじいさま』

（松居直/再話 赤羽末吉/画
福音館書店 1980）

こちらは「鬼」派の絵本。瘤が額にあることと鬼なので、『五常内義抄』や『醒睡笑』を基にしているようです。

「大方、やうやうさまざまなる物ども、赤き色には青き物をき、黒き色には赤き物をたふさきにかき、大かた、目一ある物あり、口なき物など、大かた、いかにもいふべきにあらぬ物ども、百人斗、ひしめき集まりて…」



『LE VIEILLARD ET LES DEMONS（瘤取）』

鬼達の前で渾身の舞を披露する翁。頭の先から足の爪先まで、全てに神経が行き届いています。なんと美しい所作！

なんと、青衣の赤鬼に、赤い禪の黒鬼など、かなり気合の入った出で立ちの鬼が百人も！最初は震え上がっていた翁ですが、元々舞好きだったものですから、興が乗って踊り出した鬼達を見て“死んでもいい、自分もあそこで舞いたい！”と鬼達の前に飛び出し、渾身の舞を披露します。

舞いが気に入られた翁は、必ずまた来るという約束の質草として、宝物（と誤解された）瘤を取られ、喜び勇んで帰ります。それを知った隣の「左の頬に瘤のある翁」が同じように出かけたはいいが、結果は…ご存じの通りです。

さてここで、気になる点が。小さい頃知った昔話では、「“いい” じいさん」と「“悪い（いじわるな）” じいさん」という対比があったような…。

ところがこの話では、単なる瘤のある二人の翁。隣の翁は、踊りが下手っぴなだけの普通の翁なのです。

この説話は、「物羨みはすまじき事なりとか（あんまり人をうらやましがってはいけないよ）」で締めくくられているのですが、瘤を取りたい一心で、怖いのを我慢し、苦手な舞いに挑戦した隣の翁を思うと、何だか切ないですね…。

では、『五常内義抄』の方はどうでしょうか。「智賢也 不妄語戒」の第十四にありました。おや、こちらに登場するのは…大勢の天狗達です。

主人公は、「額に瘤のある法師」です。のっけから瘤の位置も、生業も違います。

道中、山の古堂で一夜を過ごすことになった法師。夜更けに大勢の天狗がやってきて、田楽を始めてしまいます。法師は考えます。隠れていてもいずれ見つかってしまう。逃げてもすぐにつかまってしまうだろう。どうせ同じ事なら…ええい、踊ったれ！（翁といい、法師といい、変なところで思い切りがよすぎます）

藁で編んだ敷物を腰につけて座に飛び出し、面白おかしく踊る法師に、天狗達は大喝采。また来る約束の質草に瘤を取られ…という流れは『宇治拾遺物語』と同じなのですが、ここから納得のいかない展開が待っています。

この話を聞いた、隣の里に住んでいる、やはり額に瘤のある入道が、自分も何とか瘤をとりたいと、件の古堂へ向かうと、話の通り、天狗達が楽しく踊っていました。入道はその中に入り、踊りだします。ここでは、踊りが下手だったなどの描写は一切ありません。そんな入道に、天狗は言います。

「神妙に約束を違えず来てくれたから、前に預かったものを返してあげよう。」

哀れ入道は、額に角のようにもう一つ瘤をくっつけられ、泣く泣く家に帰ることになるのです。この説話の教訓は、「人から聞いたことをただ模倣して振る舞うと、後々悔いることになるよ」ということのようなのですが…。勇気を出して頑張って踊り、その踊りに特に落ち度もなかった入道は、とんだとぼっちりのように思えて、やるせない気持ちでいっぱいになります…。

『五常内義抄』の説話は、江戸初期に編まれた笑話集『醒睡笑』の巻之一及び巻之六にもつながっているとされているようですが、何故か「天狗」が「鬼」に変化して伝わっていました。

※ 巻之一の「鬼に瘤を取られたといふ事なんぞ」では、主人公の目の上にあった瘤が取れ、めでたしめでたし…で一端終わるのですが、その後の巻之六の「あるところに禅門目の上に大なる瘤を持てり」で始まる話で、巻之一の続きとして、別の瘤を持つ人物がその話を聞きつけ…と、お決まりのストーリーが展開されるのです。くわばらくわばら。）

この『五常内義抄』と『醒睡笑』の筋書きを持つ昔話は、特に東北地方から多く採集されているとのこと。ならば、青森県の「こぶとり」はどう伝わっているのでしょうか。

見つかったのは、下北郡佐井村、三戸郡田子町、同じく三戸郡五戸町のもので、全て出会うのは天狗。ちなみに、津軽方面のむがしの中には見つけることができませんでした。

佐井村と五戸町に伝わるのは、登場する妖は天狗ですが、ストーリーは『宇治拾遺物語』同様、頬に瘤があって、舞いの下手っぴな翁がでてくるものでした。

面白いのは、田子町に伝わるものです。独特なのでご紹介しましょう。

登場人物は、村の上の方に住んでいる「上瘤のじじ（以下「上じじ」）」と、下の方に住んでいる「下瘤のじじ（以下「下じじ」）」。

上じじがシミンメ様（新明様）に拝みにいったところ、「鼻ばしの長い人達（天狗）」が踊っているのを発見。岩から瘤を出して見物していたところ、何の気まぐれか、天狗は上じじの瘤を「ビヤソツてつかんで」持って行ってしまいます。瘤を邪魔に思っていた上じじは、大喜び。早速、下じじにも教えてやろう！と走って下じじの家に向かいます。

話を聞いた下じじは、それなら自分も、と走ってシミンメ様に出かけます。ちなみに、下じじの家からシミンメ様までは、一里（約4 km）もあったのですが、距離をものともせず、下じじは駆けます。首尾よく間に合い、踊りを見ていた下じじの瘤に、手ごたえあり！ああ、これで自分の瘤ももげた、とほっとした下じじですが、よく見てみると…なんと、瘤は二つに増えているのです！瘤o n瘤！（新しいパターンです）

騙された！と怒り心頭の下じじ。怒りのままに上じじの家まで走って行って（往復全力疾走の翁）、怒鳴り込み、二人は夜中に大喧嘩。ここで何故か、“かくなる上は、生豆腐に頭をぶつけて死んだ方がましだ！”と、豆腐屋に押しかけ、生豆腐を作らせる下じじ…。

結局、このお話は「とふ（豆腐）瘤にぶつつけても瘤取れなかったし、死にもしなかったって、これでどっとはれた」と、唐突に終わるのですが、下じじのその後が大層気になります。

まあ、これだけのバイタリティを見せつけてくれた下じじですから、強く生き抜いてくれそうです。

『宇治拾遺物語』や『五常内義抄』から文字として表れた「瘤取り」の物語は、様々な形で、時には田子町に伝わるお話のように独自の変化を遂げ、日本各地に伝わり、残されていきました。

そのような各地に伝わったものを典拠、或いは参考にして創作された、絵本や紙芝居も多くあるため、児童室で見つかった資料には、「おじいさん2人が願掛けのために山中のお堂にこもり、そこで一緒に天狗に出くわす」（『聴耳草紙』佐々木喜善/著 筑摩書房 1964）という、岩手に伝わる昔話を基にした絵本などを含め、ストーリーが少し違った話や、天狗・鬼と両方が登場人物として存在するわけです。



「わしは鬼に取ってもらったよ」
「えー、いいなー。」

青森県では、「天狗」が登場する「むがしこ」が多く伝わっているため、耳にした語りから、「天狗」派になった方がいらっしゃるかもしれません。また、子どもの頃、どの絵本で「瘤取り」に触れたかによっても、「天狗」派と「鬼」派に分かれることでしょう。

元々「鬼」も「天狗」も、山の神、もしくは山という自然そのものとして信仰されていたという側面をもっています。語りが伝わる過程で、二つのイメージが混合してきたということは無理なく考えられます。

皆さんの中の「こぶとりじいさん」は、どこの瘤を、誰に取ってもらいましたか…？
それではこれで、どっとはらい。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先 ●

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757
電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

こどものひろば



すてきな絵本の作者と「根っこ」が同じ！「**ねねっこ**」を紹介します！



ねねっこコーナーでは、『11 ぴきのねこ』がお出迎え。ここにある絵本やかみしばいは、自由に読むことができます。

青森県には、すてきな絵本をつくってくれた人がたくさんいます。

『11 ぴきのねこ』や、『ぶどう畑のアオさん』の、**馬場のぼる**さん。『アフリカの音』や、『ひとでのたいそう』の、**沢田としき**さん。『ぞうくんのさんぽ』や、『なきむしおばけ』の、**なかのひろたか**さん…。

そういった郷土出身の絵本作家の作品を、子どもたちがいつでも手にとって読むことができ、親しんでもらえるよう、児童閲覧室にコーナーを設置しました。

このコーナーの名前は、「**ねねっこ**」。

【「ねねっこ」とは？】

自分が生まれ、育った場所は、いつか離れるときが来ても、心のよりどころ、根っことして残っていくものです。

絵本も同じです。小さいころに出会い、親しんだ絵本は、大人になっても、忘れずにずっと思い出として残っていきます。

子どもたちが、自分の住む「青森県」を好きになってくれますように。そして、そこから生まれた絵本が、心の根っこになりますように。そんな思いを込めて「ねねっこ」と名付けました。



ねねっこの絵本は、児童室のアイドル・くまがいさんの「ねねっこ」シールが目印です。

児童閲覧室においでの際には、たくさんの方々に読んでいただいている「**Nonokko(ののっこ)**」(県立図書館だより第27号参照)の本と同様に、「**ねねっこ**」の本も楽しんでみてください。

※「**ねねっこ**」「**Nonokko(ののっこ)**」の本は、いつでも皆さんに読んでいただけるよう、貸出していませんが、貸出できる同じ本があります。カウンターにお尋ねください。



今回は、当館で刊行した『青森県立図書館郷土双書』の中から第1集・2集・3集を紹介します。『郷土双書』は、青森県や青森県ゆかりの人物を知ってもらうため、世に発表されていない著作を発掘して紹介することを目的として刊行されたもので、1969年から1985年（第25集）まで刊行されました。

1968年、当館において「平尾魯仙(ろせん)画業展」を主催したこともあって、はじめの3集は、魯仙の著作を取りあげています。

魯仙は、1808年（文化5年）、弘前紺屋町の魚商小浜屋の長男として生まれ、幼いころから好んで絵を描き、人を驚かすほどの才能がありました。画家としてだけではなく、他にも多くの著作を残しています。名前は亮致(すけむね)。魯仙は画号。

『青森県立図書館郷土双書 第1集 谷の響』

津軽地方の神霊や妖魔に関する不思議な言い伝えを集めたもの。1860年（万延元年）の作で、5巻・94話からなる。原本が消失しているため、弘前市立弘前図書館所蔵の写本など現存する三種を校合して集成。



『青森県立図書館郷土双書 第2集 明治日記』

幕末の文久元年から明治3年までの約10年間の公的文書を書き写したもの。明治維新の時代を再考できる資料。原本（弘前市立弘前図書館所蔵）の翻刻。

『青森県立図書館郷土双書 第3集 洋夷茗話(よういめいわ)』 ※「よういみょうわ」とも

1854年（安政2年）、黒船が来ると聞いて箱館（函館）に出かけ、来泊中の黒船と異国人を自分の目で観察し、得意の挿絵とともに説明したもの。原本（弘前市立弘前図書館所蔵）の縮写復刻。

挿絵には、町を行き交う異国人の姿、履き物・帽子、楽器、本、葬儀の様子・墓標、洗濯した服を船の帆桁に干している様などがあり、様々なものに興味・関心があったことがわかります。

縮写復刻に際し、「原本では挿絵はすべて着彩されているが、費用その他の点で、必ずしも着彩を必要としないと思われるものは墨一色とした」（あとがき）点が残念なところ です。

資料はいずれも館外への貸出が可能です。ご希望の方は職員にお尋ねください。

なお、当館で刊行ののち、『谷の響』は『日本庶民生活史料集成(16) 三一書房 1970』に、『洋夷茗話』は『生活の古典双書(12) 1974』に収められました。

また、『洋夷茗話』は、現在、原本所蔵館である弘前市立弘前図書館のWEBページ「おくゆかしき津軽の古典籍」の「通史編2引用資料」の中で公開されています。

ようこそ文学館へ！

近代文学館資料の紹介(第33回)

「特別展 詩人・一戸謙三」展示資料から

①パストラル詩社第6詩集『落葉する頃』

大正8年、後藤健次の呼びかけにより、一戸玲太郎(謙三)、桜庭芳露、天内浪史らの同人が集結し、青森県初の詩結社「パストラル詩社」が弘前に生まれました。結社名の「パストラル」は「牧歌的、田園的」の意で、一戸の発案によるものでした。同年9月に第一詩集『田園の秋』を刊行、以後大正12年までに全7冊の詩集と3冊の雑誌を刊行しました。

既に東京で活躍していた同郷の詩人・福士幸次郎に添削指導を仰ぐと、福士は懇切な添削によって彼らの熱意に応え、激励しました。時には二昼夜を費やすほど添削指導に没頭し、福士の詩人仲間だった室生犀星や百田宗治を驚嘆させたといひます。

パストラル詩社の活動はわずか4年で終わりましたが、同人の桜庭芳露は上京して白鳥省吾主宰の「地上楽園」同人となり、天内浪史も在郷のまま「地上楽園」同人として詩集を刊行。後藤健次は八戸市で詩誌「北方詩風」を主宰。そして、一戸謙三は、昭和前期から戦後まで長く県内詩壇の中心となり、多くの後輩詩人を導きました。



『落葉する頃』(大正10年12月15日 パストラル詩社刊)

②『津軽方言詩 茨^{バラ}の花コ』

一戸謙三は、1934(昭和9)年から翌年にかけて5冊の「津軽方言詩集」を発刊していますが、その第一輯が『津軽方言詩集 茨^{バラ}の花コ』(昭和9年10月15日)です。わら半紙を12.5cm×17cmの大きさに裁断し、表紙の上からホチキスで右一箇所を綴じただけ、ガリ版刷りのわずか12ページという「本」です(定価2銭)。後記には、体裁の貧弱なことを認めながらも「しかしこれは私のこれまで作品のうちで最も愛してゐるものである」と記されています。

収められた7篇の詩から、表題作「茨^{バラ}の花コ」を御紹介します。

茨^{バラ}の花コ
キア^ド 街道 ばだね、 ゴミ^ミ 埃 かぶて
それでも咲えでる此の花コ。



カウンターからひとこと(第32回)



今回は“雑誌”についてお知らせします。

雑誌について

現在、一般閲覧室に配架している雑誌は、約300誌あり、雑誌の最新号は、雑誌架に並べてあるので、館内で自由に閲覧できます。

今年度、新たに10点の雑誌を追加しました。



【一般閲覧室雑誌架】



【今回新たに追加した雑誌】

過去の雑誌について

過去の雑誌（バックナンバー）は、永年保存の雑誌と永年保存でない雑誌に区別して書庫に保管しています。

○永年保存の雑誌・・・館内閲覧のみで貸出はできません。

○永年保存でない雑誌・・・1週間の特別貸出が可能です。

詳しくは、カウンターの職員までお尋ねください。

○過去の雑誌を館内閲覧したい場合→カウンターの職員へお申出ください。

○過去の雑誌を借りる場合→特別貸出の申請が必要です。下記をご覧ください。

雑誌の貸出（特別貸出）について

雑誌の貸出の際は、特別貸出申請書の記入が必要です。その後、「特別貸出用返却袋」と明記された青い専用袋に、貸出票と一緒に入れて貸出しています。

ご返却の際は、雑誌と貸出票を専用袋に戻して、返却期限までにカウンターまたはブックポストへご返却ください。

